

子どもの創造的音楽表現に及ぼす保育者の影響

持田 京子*・金子 智栄子**

Abstract

This is a demonstration study designed to pay attention to the relations between children and preschool teachers and to investigate ways to support creative musical expression for the children. It investigated documents dating back as many as 5 years ago about music in the child-care field in Japan. As a result, many research projects captured as teaching methods, the ability and the expression of children. But no research was considered from the viewpoint that preschool teachers disturb the musical expression of children. Preschool teachers are evaluators for children. Thus the possibility is considered that children could not freely express music expression. Therefore we observed the musical expressions of 3-year-olds children as a hypothesis in our consideration that “preschool teachers interfered with the creative musical expression of children.” As a consequence, we recognized a trend in which preschool teachers more favorably considered educational and guidance relations than they did the expression of the children. Lastly, the importance of how preschool teachers watched the creative expression of children was pointed out.

Key Words: 創造的音楽表現, 影響, 子ども, 保育者

1. 本研究の問題と目的

1989年に改定された幼稚園教育要領で、「表現」は5領域のひとつとして位置付けられた。領域「表現」においては、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」¹⁾が重視されている。子どもの音楽表現でも、その表現を子ども自らの育ちとしてとらえて、子どもの成長、発達を援助していくことが求められている。

* 大学院人間学研究科

** 人間学部児童発達学科

梅本堯夫（1999）は幼児期の子どもの生活や成長にとって音楽が必要不可欠なものであることを論じている。梅本が「何よりも音楽は子どもにとって遊びの一種である」²⁾と述べているように、子どもは遊びの中で環境を通して音楽表現をおこない、感性を養っている。実際保育者は子どもの内面を理解しながら、子ども自身の音楽表現を豊かにしようと日々努力している。その際に、まずは子どもの内面に流動的に存在するものを音楽的にひき出すという視点をもつことが重要である。

山本美紀子（2004）³⁾は1990年から2000年までの乳幼児の音楽に関する研究を日本保育学会、日本音楽教育学会の論文を基に検索している。フェルプスの分類を参考に歴史的、記述的、実験的、分析的と4つに分類したところ、記述的が全体の71%以上をしめていた。一方、小池美知子（2008）⁴⁾らは乳幼児の音楽を表現としてとらえ、2003年から2007年までの乳幼児の音楽に関する研究129編を、テーマを基に身体表現、心情表現、音楽表現などに分類している。またその共通性から調査研究、実践研究、実験などの研究方法により分類している。表現の視点からみると「感性と表現」「身体表現」「劇遊び」「幼児の心情」「音環境」「わらべうた・遊び歌・手遊び」「歌唱」「音楽活動」「創造的な音楽活動」「リトミック」「オペレッタ」「幼児の表現へかかわる保育者の理念」「楽器演奏」「言葉」の14に分類された。さらに、その結果を「意義的研究」「歴史的研究」「調査研究」「実践研究」「観察事例研究」「実証的研究」「その他」に類別し、まとめている。

そこで、山本（2004）や小池（2008）を参考に、幼稚園や保育所における3歳児から就学前の6歳児を対象としたこれらの音楽に関する研究に焦点をあてて、2004年から2008年頃までの過去約5年間の研究を調べてみた。

教育、保育の観点から分類すると、大別して、教授・指導方法、音楽能力、音楽表現の3つに分類できた。教授・指導方法に関する研究では、勝紀美（2004）⁵⁾が打鍵楽器、北川直子（2004）⁶⁾が歌唱、中西智子（2004）⁷⁾が太鼓打ち、亀山有希（2008）⁸⁾がダンス、大串千代美（2008）⁹⁾がリトミックの研究をしている。その他、前田真由美（2004）¹⁰⁾や北村恵子・平沢摂子（2005）¹¹⁾の音楽指導実践の研究、児嶋輝美・吉岡妙子・熊谷公博（2007）¹²⁾の音楽指導研究などがあげられる。

音楽能力に関する研究では、水崎誠（2005）¹³⁾の声の使い分け、水戸博道・岩口摂子・内山恵子（2006）¹⁴⁾の歌の記憶、武田美知子・加藤明代（2007）¹⁵⁾の歌うときの音程、小長野隆太（2006）¹⁶⁾の声高の正確さという歌唱能力の研究があげられる。その他、石井信夫（2004）¹⁷⁾の音楽享受における表情評定調査、山崎晃男（2004）¹⁸⁾の即興演奏調査、渡邊亮太・上林ノブ子・浪山厚子（2005）¹⁹⁾の音認識の調査、長島礼（2006）²⁰⁾の音楽表記の調査などがあげられる。

自由な遊びの中での音楽表現に関する研究では、今川恭子（2005）²¹⁾の生活の自由な文脈の中で子どもの音声をとらえる研究、今川恭子（2006）²²⁾の幼児と音の関わりをとらえる研究、そして矢部朋子（2008）²³⁾の自由な遊びの中で子どもの音楽的やり取りをとらえる研究

が3件あった。

保育現場での音楽に関する最近の研究の動向を探ったところ、教授、指導方法や音楽能力に関する研究の文献と比べて、子ども自らの音楽表現に関する研究の文献は少なく3件しかみあたらなかった。幼児期の音楽活動を、教授、指導方法、ならびに音楽能力としてとらえることは、子どもの能力をある枠組みでとらえ、音楽的活動を方向づけやすくなり、実際に子どもの音楽的な活動を制約することになると考える。

坪能由紀子(2005)²⁴⁾らは『幼児の創造的な音楽活動の開発に関する研究』において、音楽活動における「制約」が子どもにとって創造的な活動の方向性を示すことを認めているが、「制約」が不適切な場合は創造性の表出や発展につながらないことを述べている。

これらのことから、保育者が一方的に音楽的な知識や技術を獲得させようとすることは、子どもの創造的な音楽表現を制限し、妨げることにつながるのではないかと考えた。実際筆者らも、子どもが遊びの中で保育者の教育的な配慮からの援助に気を取られたり、保育者のまなざしを意識することによって、子どもの創造的な音楽表現が妨げられることを、保育経験から実感している。しかし、過去の研究の中には保育者が子どもの創造的な音楽表現を妨げる、という視点からみる研究はみられなかった。

そこで本研究では、「子どもが遊びの中で表す創造的な音楽表現が、保育者の存在によって損なわれる可能性がある」ことを仮説として、保育場面からその場面を抽出することで仮説を証明する。保育者が子どもの創造的な音楽表現を妨げるといった実証研究はまだみあたらない。そこで本研究結果は、保育者の子どもの音楽表現に対する関わり方に大きな示唆を与えるものとする。

2. 方法

(1) 観察期間 平成17年5月～平成18年3月

(2) 対象児・観察回数 3歳児はリズムを記憶し個性的に表現することが可能(ゴードン1969, モーグ1968)なことから、東京近郊の公立幼稚園3園において担任が適度に自分を表現できるとした3歳児クラスの子どもの4名を選出。M男児(観察開始時4歳1ヶ月、観察回数32回)、F女児(4歳3ヶ月、20回)、S男児(3歳9ヶ月、20回)、G男児(4歳3ヶ月、16回)。

(3) 観察方法 主に遊び場面での自然観察を行った。子どもの音楽表現をメロディ、リズム、ハーモニーの視点から捉え、ビデオカメラ、ラジオカセットにより録画、録音し、さらに筆記記録も行った。クラスの担当者と定期的にエピソード記録の妥当性を確認した。

3. 結果と考察

観察内容の妥当性についてはクラスの担当保育者と確認し、考察の妥当性については筆者ら

の他、保育専門職者4名で確認した。

事例1 保育者に歌いかけられ表現を中断したM児 10月14日（晴れ）10:30～11:05

3歳児の保育室の前の園庭に保育者がござを敷いてその上に沢山どんぐりが入ってある木の入れ物を置く。M児とK子が来て保育者と一緒に座る。M児は保育者と木の入れ物に盛ってあるどんぐりにさわる。M児はどんぐりの入れ物に片手をつっこんで回す。今度は両手をつっこんで手をグルグル3回ほど回す。K子もにこにこして、もうひとつの入れ物に入っているどんぐりに片手をつっこんで、M児と顔を見合わせていると保育者が「どんぐりころころ」を歌い始める。M児とK子は歌い始める。歌い終わった後にM児は「うさぎピョンピョン」といいながらござの上で両手を曲げて小さく跳ねる。K子が「わたし、ことり。きもちいい。」といい、「パタパタ」といいながらござの上で立ち上がって手を上下に動かしながらござの上と一緒に跳んで回り遊ぶ。保育者がいなくなるとK子が「どんぐりころころ」の歌を歌い始める。M児は座って片肘をあげてK子の歌った♪「どんぐりころころどんぶりこ」に続いて片手でどんぐりをさわりながら「どんぐりポットンこんころりん おいけでポットンこんころりん」と歌うとK子がその後をついで「どんぐりころころよろこんで、ピョンピョンピョン。」と続けた。

（考察）保育者が「どんぐりころころ」の歌を歌うと、一旦は保育者と歌を共有したものの、うさぎとなるなど違った表現遊びへと移行している。M児が身体でどんぐりのリズムを感じ、K子と味わっているところに保育者が既成のリズム、メロディを発した結果、M児がどんぐりから感じ味わう自由な表現が中断したと考えられる。保育者がM児とK子が共感しあいながらどんぐりをかき回す表現をもう少し見守ることによって、M児が心ゆくまでどんぐりを五感で感じ、音やリズムを主体的に表現する可能性があったと考えられる。

事例2 保育者に応援され表現をやめたF子 11月8日（晴れ）10:45～11:20

保育者がもうすぐ行われるワクワクフェスティバルの準備としてマジレンジャーとプリキュア〈注〉のCDを用意し交代でかけ始める。A子、M子、N子、T子らはその音楽を聴きながら保育者のほうへ行く。保育者がホールの中央に舞台のように箱積み木を並べると、A子たちはその上に乗ってそれぞれが踊り始める。F子もA子たちが台の上で踊り始めるのを見て自分も台にのり、A子たちをみながら身体を動かし始める。保育者が手を大きく叩き、子どもたちを応援し始める。F子は手を叩きながら応援する保育者を見ながらリズムに合わせて上半身、足を動かし、手や腕でリズムをとるが途中でやめる。その後F子は一人で離れた製作コーナーでストローに折り紙を切った三角のようなものを何枚も何枚も丁寧に張る。出来上がったものを手に持ち、それを振りながらスカートを大

きく回して一人で製作コーナーのそばで、プリキュアに類似したメロディを口ずさみながら踊る。(注プリキュアは女兒に人気のあるテレビのアニメ)

(考察) 保育者の応援に応える様にリズムを合わせて踊るが、すぐに踊りを中断している。手を叩いて応援する保育者のまなざしを意識した結果、内面から湧き出るリズムを表すことができずに踊りを中断したことも考察できる。保育者側にはフェスティバルの準備として皆で一緒に音楽を楽しみたいという意図がみられるが、F子が後に誰もいないところで類似したメロディを口ずさみながら、自分のリズムで踊っていることから、F子が心ゆくまで自分なりの音やリズムを楽しむ満足しがっていると推測できる。保育者がそっと見守ることによってF子はより自由に積み木の台の上でリズムを感じ、踊ったのかもしれない。

事例3 保育者の参与で他児に歌うことを譲ったG児 10月27日(雨) 9:30～10:15

G児は部屋の角から椅子を二つ持ってきてH児に渡して並んで座り、『大型バス』の歌を運転の動作をしながら歌い始め、H児も歌い始める。それを見た保育者がすぐにG児たちの遊んでいる場所に来て、G児たちが座っている横や後ろにバスのように椅子を横5列、縦2列に並べる。それを見た他児4人がやって来てそこに座る。G児は他児が集まってくると歌をやめて、そこにきて座った歌の上手なM子に「歌って」と頼む。M子が「大型バスにのってます」と歌い始めるとG児たちも運転の動作と共に歌い始める。次に「つぎにデズニールランドにしよう」といい、「デズニールランドにいます」とM子が歌い始めるとG児たちも運転の動作と共に歌い始める。保育者それを見守っている。その後、M子主導に歌が続く。

(考察) G児は他児と歌ってバス遊びを楽しんでいた。保育者がその個人的な遊びを集団遊びへと発展させようとして椅子を並べ、そこへ大勢が参加したことから、G児は自ら歌うことをやめて他児に歌うことを頼んでいることがみえる。その後歌はM子主導の下で進んでいくことから、G児は保育者の意図を受け入れ、遊びの発展性を考え、M子に代わりに歌を歌うことを頼んだとも考えられるが、保育者が椅子を並べずにもう少しG児の表現を見守ることによってバスごっこがG児たち自らの遊びの自由な展開となり、G児の歌が遊びと共にさらに発展した可能性があることを考えておきたい。

事例4 保育者に援助されたために表現が中断したS児 11月15日(晴れ) 11:10～11:45

S児はK児ら5人で砂場で砂山をつくっている。砂山が大きくなると「ぺったん。ぺったん」と言いながら砂山を叩く。出来上がるとS児は「シュワーチ、シュワーチ」とその

上で何度もK児とリズムを合わせて笑いながらジャンプをする。他児も一緒になってジャンプし、砂山を壊す。何回も何回もリズムよくジャンプを繰り返した後、何やら歌のようなものを口ずさみながらS児は太鼓橋へ走って行き、太鼓橋を二つ前へ進んでぶらさがって身体で大きくリズムをとる。次に次いでK児もすぐ後ろにぶら下がり身体を振ってリズムをとり二人で笑う。そこへすぐそばにいた保育者がS児のそばへ行き手を添え、前へ進ませようとするがS児は降りる。

（考察）S児は砂場で、身体で感じたリズム、声に出した音を心地よく感じ、そのことが太鼓橋の遊びへとつながっている。しかし保育者がS児が心身で感じているリズムには気がついていないために、S児の太鼓橋での移動に、指導の主眼をおいた結果、リズムが中断したと考えられる。保育者がもう少し見守ることによってS児はK児と自らのリズムを味わい楽しめた可能性があることを考えておきたい。

事例5 保育者に見守られ気持ちよく表現したM児 11月11日（晴れ）11:20～11:50

よく晴れた秋晴れの天気、近くの大学の庭へ散歩に行く。M児は散歩から帰り手に握りしめたカマキリの卵がついた小枝を笑顔で走って行って保育者に渡す。保育者が笑顔で受け取り、それをそばの棚に飾ると、安心したように部屋でハンカチを振りながら走り、創り歌を歌う。「せんたくものはせんたくよ～。よいっしょ。ララララ～、ぎゅっと。ぎゅっと。」その後外に出て何やらメロディを口ずさみながら拾ってきた葉っぱを一人で並べている。

（考察）M児は秋晴れの気持ちよい散歩や、見つけたカマキリの卵が嬉しくてたまらないでいる。それを保育者がさりげなく受け止め、共感し見守るところから、M児の心身から溢れ出す思いが音楽表現として表れている。ここでは実際の保育者との音楽的なやりとりは見られないが、保育者との日常的なリズムある音楽的やりとりを読みとることができる。

「子どもが遊びの中で表す創造的音楽表現が、保育者の存在によって損なわれる可能性がある」ことを仮説として、子どもの音楽的な表現の現われとその過程を、子どもと保育者のかかわりに注目して観察した。その結果、3歳児クラスの子どもの音楽表現は、ゴードンやモーグの研究（1969）²⁵⁾にみられるように、感じたことを歌やリズムや音で表す独自で個性豊かなものだった。保育者は様々な場面において子どもの音楽的な発達を願い、環境を提供する努力をしているが、場面によっては子どもが保育者の言動に注目するため、その表現が中断されていた。子どもが遊びの中で表す創造的音楽表現が、保育者の存在によって損なわれるという仮

説が支持されたといえる。子どもがその表現を中断する場面では、保育者が遊びの中で子どもが音楽的に感じている行為を見守るより、保育者自身の子どもに音楽を共有してほしい、手段を身につけてほしいという思いが優先されていることがわかった。今後、保育現場における子どもの音楽表現に対するかかわり方が、教授や能力の視点だけではなく、「保育者が子どもの音楽表現を制約し、妨げる可能性」といった視点をもつことが重要であることがわかった。

音楽教育の研究で、幼児が表す表現を音楽的にみる研究は少ないが、キース・スワンウィック（1988）は幼児期の子どもの音楽を「遊びとしての芸術」としてとらえ、『音楽と心と教育』において子どもの成長と音楽教育の見方について幼児期から青年期まで詳しく著している。キース・スワンウィック（1988）は子どもの音楽的発達を、経験されたことからの音楽的発達に限定してみるのではなく、遊びの中にみる必要性を「子どもの自発的な音楽行動を観察すれば、テストという拘束された活動から得られる以上の多くのことがわかるようである。」²⁶⁾と述べている。スワンウィックはその音楽教育理論の基礎を「生き生きとした人間の特質である遊びが、本質的にすべての芸術活動と密接に関係するという考え方に注目したものである」²⁷⁾に据えて、子ども自らが遊びの中で音楽活動をしながらか発達していく要素を3つあげている。

キース・スワンウィックの遊びと音楽の3要素

(1) マスタリー的要素

子どもには音を制御して味わう、という自然的な欲求がある。1歳未満の喃語の多くは音を制御する喜びに明らかに関係しているように、幼児期の子どもの音やリズムに対する興味と喜びは、音楽の断片の反復を楽しみながら音やリズムを自分なりにマスターして再現して表わす音素材への制御の移行へと表われる。

(2) 模倣的要素

子どもが音楽的なものに共感を覚えているときにはある程度、その音楽的なものと同じ様な感情となる。約1歳半頃から子どもたちは「自分の動きを音楽のリズムに合わせ始める。これは音楽に対する感覚上の印象とリズムからの模倣である。そのように幼児期の子どもは、音楽の表現上の特質を自分なりに感じて、身体を調節し身体的模倣としてあらわす。このことは幼児期の後期に減少する傾向にある。

(3) 想像的な遊びの要素

子どもは遊びの中で周りの色々な要素から新しい関係性の世界を創りだす。例えば良く知られている歌に別の新しいものを断片的にとり入れるなど子ども自身が想像的な遊びをつくっていく。スワンウィックは幼児期の子どもが音楽的に「独創的な創造」ができるとは考えていないが、この時期が以前の段階ですでに吸収された音楽的ないろいろな断片から新しい音楽的なものを形成していく時期であることを述べている。

スワンウィックは子どもがこの3つの要素を行ったり来たりしながら螺旋状に音楽的に成長

していくことを述べているが、それは言い換えれば、子どもが音楽的に自立していく方向性を表わしていると考えられる。

スワンウィックの述べるように、もともと子どもはそれぞれの音楽的なものを持って保育現場にいる。そして子どもは五感で音楽的に感じ味わう経験をして、自ら興味、関心をもった音楽的なものを、個性的に繰り返し、表すことによって、さらに音楽的に成長し、音楽的にも自立していくのである。

しかし、子どもは遊びや生活の中で自分が感じる音楽を五感で受け止めているが、その表現は未熟であり大人にとって見えにくい。また、保育者はつい多くの音楽を子どもに与えたくなり、見た目のきれいな音楽的表現をつくりたくなる。そのために保育者は子どもに一方的に音楽的な環境を与え、獲得させたいといった考えに陥りやすい。今回の研究から習慣から決まった歌を歌うことや、大人にとって分かりやすいリズム、メロディ、ハーモニーといった音楽をさせることを優先してしまう保育者の介入は、却って子どもの創造的な表現を中断させる可能性があることがわかった。

また、事例5において、保育者が対象児の音楽的に表したい気持ちを読み取り、見守ることで、対象児のよりいっそう生き生きとした表現につながっていたことから、子ども自らが音楽を模倣、想像、マスタリーしながら個性的に音楽を表す姿を受け止め、尊重することが子どもの音楽的な成長にとって重要であることがわかった。このように保育者は、教育者というかわりよりも、子どもの音楽表現に思いを巡らせながら音楽的環境を用意し、見守り、育てていくことが求められる。

今川恭子（2006）^{22）}は子どもの音楽表現は、子どもの周りのあらゆる環境の視点と交流しながら捉えなおすことで新たな展望がみえる、ことを述べている。子どもは特に何かを意識しながら歌や身体的リズムなどの音楽的なものを表わしているわけではない。あらゆる環境から自由に音楽的なものを感じ、取り入れ、その音楽的な経験を繰り返している。それだけではなく他者と同じ音楽的イメージを持ち、音やリズムを共有し、音楽的発達を深めていくと考えられる。このような、子どもにとって音楽的なものを通して人を受け入れ、人に受け止めてもらい創造的な世界を味わうということは、生きていくことの実感でもありと考える。

子どもは、大人の思惑とは異なった音楽を展開する。保育者は子どもの音楽を広い視野からとらえ、その表現の可能性を信じ、よく観察しながら、さらなる音楽表現へとつながるよう心がけることが必要である。本研究において、これからの幼児音楽教育が、子どもの心に音楽を植えつけることだけでなく、子どもの内面に目を向け広い視野から「幼児が音楽する心を育てる」ことの大切さが示されたと考える。

4. まとめ

現在の我が国における保育現場での音楽研究の動向を探った結果、音楽を子どもへの指導や

子どもの音楽能力の視点からみる研究が多いことがわかった。しかし、音楽を子どもへの指導や子どもの音楽能力の視点からみることは、子どもの音楽表現を制約し、創造的な音楽表現を妨げる可能性があると考えた。そこで、子どもが遊びの中で表す創造的音楽表現が、保育者の介入や存在によって損なわれる可能性があることを仮説として、子どもの音楽的な表現の現われとその過程を、子どもと保育者のかかわりに注目して観察した事例を検討した。その結果、子どもが保育者の言動に注目するため、その表現が中断する場面があり、仮説が支持された。また保育者が対象児の音楽的に表したい気持ちを読み取り、見守ることで子どもの生き生きとした、さらなる創造的な音楽表現につながるということがわかった。

今後、子どもにとって、評価者でもあり、モデルでもある保育者の子どもへのかかわり方が、「子どもにどのような音楽を与えるのか」「子どもがどのような音楽的能力を持っているのか」を主眼とするのではなく「子どもは何を感じ、何を思い浮かべて音楽的に表現しているのか」を理解し「どうしたらより豊かに内面を音楽的に表現していくのか」その成長を見守る姿勢が大切であることが示唆された。そして保育現場において、保育者が子どもの音楽表現を制約し、妨げることがあることに留意しなければならないことが示された。

本研究で用いた文献は、検索可能なものであってすべてではない。また事例は偶発的であり、事例数も少なく内容も様々である。もっと多数の研究や事例を分析し考察する必要がある。これらのことを基としながら今後とも多くの研究者、保育者と子どもたちに学びながら、自らの保育経験を反省しつつ研究を進めていきたい。

引用文献

- 1) 文部科学省・厚生労働省 2008 年度幼稚園教育要領・保育所保育指針（全文）2008 萌文書林 8
- 2) 梅本堯夫『子どもと音楽』 2003.東京大学出版会 61
- 3) 山本美貴子 2002 『乳幼児の「音楽」に関する研究の動向』2002 日本保育学会第 55 大会発表論文集 82-83
- 4) 小池美知子・越智由紀子 『保育内容表現（音楽）に関する先行研究の動向』2008 松山東雲女子大学人文科学部紀要 16 35-38
- 5) 勝紀美 『マリンバ・木琴指導からの考察 その 1－幼稚園年長児を対象に－』2004 成徳学園短期大学研究紀要No.34, p51-70,
- 6) 北川直子『幼児を取り巻く音楽環境と保育現場での歌唱指導の実際』2004 一宮短期大学紀要 43 号, 79-58
- 7) 中西智子『幼児音楽におけるコーディネーショントレーニング』2004, 三重大学教育学部研究紀要 第 55 巻, 教
- 8) 亀山有希『幼児教育におけるダンス・表現活動の導入に関する研究』2008, 日本体育大学紀要 第 37 巻 第 2 号, 97-106
- 9) 大串千代美『保育に活かすリトミック』2008, 九州竜谷短期大学紀要第 54 号, 37 - 58
- 10) 前田真由美『子どもの音楽表現とその意味』音楽教育実践ジャーナル, 2004, Vol.1, No 2, 52-58
- 11) 北村恵子・平沢摂子『幼児の音楽指導に関する研究その 1』2005, 上田短期大学紀要 vol.28,

85-91

- 12) 児嶋輝美・吉岡妙子・熊谷公博『保育所における音楽表現の計画と実践』2007, 徳島文理大学研究紀要第70号, 37-44
- 13) 水崎誠『話声と歌声の使い分けに関する横断的研究』2005, 北海道教育大学紀要（教育科学編）第55巻2号, 105-111
- 14) 水戸博道・岩口摂子・内山恵子『幼児の歌の記録』2006 宮城教育大学紀要 Vol.41, 65-71
- 15) 武田美知子・加藤明代『乳・幼児の歌唱能力の発達に関する一考察Ⅲ－音程の分析を通して－』2007, 静岡大学教育学部研究報告（教科教育学編）第38号, 255-264
- 16) 小長野隆太『幼児の「歌唱の声高の正確さ」に関する縦断的研究－音高再生能力, 音高弁別能力, および「話声」と「歌い声」の技能の使い分けに着目して－』2006, 広島大学大学院研究紀要 第2部 第55号, 451-456
- 17) 石井信夫『保育園児の音楽享受における情動的意味についての実験的研究』2004 広島大学教育学部音楽文化教育講座, 国立情報科学研究所 Vol.16, 1-12
- 18) 山崎晃男『幼児による音楽演奏における感情の表現』2004 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, No.3, 97-105
- 19) 渡邊亮太・神林ノブ子・浪山厚子『音楽指導が幼児の音高認知に与える影響』2005, 日本保育学会第58回大会発表論文集 794-795
- 20) 長島礼『幼児の音楽反応に関する一考察－被験児Aのリズム表記を通して』2006 聖和大学論集 No.34, 85-93
- 21) 今川恭子『幼児の音声表現を支えるもの－多様な声を使うこととその背景－』2005 立教女学院短期大学紀要 Vol.37, 87-97
- 22) 今川恭子『表現を育む保育環境－音を介した表現の芽ばえの地図－』2006 保育学研究第44巻 156-166
- 23) 矢部朋子『擬音語を用いた幼児の音楽表現－ねごっこの事例から－』2008, 幼年児童教育研究 第20号, 55-62
- 24) 坪能由紀子 木村充子 味府美香 小川博久 裴珉卿『幼児の創造的な音楽活動の開発に関する研究』2005 日本女子大学大学院紀要 Vol.11, 2005, 225-233
- 25) 梅本堯夫『子どもと音楽』2003.東京大学出版会 39-43
- 26) キース・スワンウィック（野波健彦・石井信生・吉富巧修・石井成美・長島真人）1992 音楽と心と教育 63
- 27) 前掲書 80 ページ, 19 行

参考文献

- (1) 安藤昌子『音楽活動－子どもの「楽しかった」を引き出す工夫』2007, 名古屋柳城短期大学紀要－大29号, 203-218
- (2) 裴珉卿『幼児の主體的な表現を支える音楽活動』2007, 子ども社会研究 13号 496-1
- (3) 深見友紀子・富田芳正・横山七佳『電子キーボードを活用した幼児の音楽セッションに関する研究』2006 京都女子大学発達教育学部紀要 Vol.2, p33-42
- (4) 鍛冶礼子 小林直美 紫竹英理 宮野モモ子『幼児への歌唱指導についての一考察』－自分から歌うときの声域－ 2006 千葉大学教育学部研究紀要大 Vol.54, 63-68
- (5) 水崎誠『幼稚園年長児の無伴奏歌唱の特質』2007 北海道教育大学紀要（教育学科編）第58巻第1

号, 189-195

- (6) 持田京子・金子智栄子『子どもの創造的音楽表現に与える保育者の影響』2008, 日本保育学会第61回大会発表論文集 309
- (7) 長島礼『幼児の音楽的能力の発達と音楽の興味についての研究』2007, 聖和大学論集 No.35, 107-112
- (8) 清水宏章・金田重郎他4名『センサー・画像・音声のデータ分析による幼児音楽指導支援システム』2004 社団法人情報処理学会 研究報告, 13-18
- (9) 白石昌子『身体表現を伴う幼児の音楽表現をみる目線』2007, 音楽文化創造, Vol.46, 52-56
- (10) 竹村寿美子『保育における表現の問題』2007, 四天王寺国際仏教大学紀要第44号 275-279
- (11) 吉永早苗『幼児期のマーチングバンドに関する考察—その是非を問う』2006, 音楽教育実践ジャーナル Vol.3, No2, 6-15
- (12) 吉田若葉『幼児の礼拝における讃美としての合奏に関する実践報告』2007, 北陸学園短期大学 Vol.39, 105-121
- (13) 渡邊優子『家庭における幼児の歌唱行動—幼稚園における歌唱との関連』2008, 新潟青陵幼稚園保護者へのアンケート結果』新潟青陵大学紀要第8号, 231-235

謝辞

研究から学ばせていただいた多くの研究者の方々, 観察させていただいた園の子どもたちや関係者の方々, お忙しいにもかかわらず多くの助言, ご指導をいただいた園の先生方, 青木久子先生, 文京学院大学院の先生方に心から感謝をささげます。

(2008.12.10 受理)